

対人葛藤場面における児童の謝罪と罪悪感の関連

田村 綾菜

問 題

私たちは他者とのコミュニケーションにおいて、相手との良好な関係を維持するために、相手の気持ちを理解し、嫌な思いをさせないように行動しようとするが、意図せず相手を傷つけたり、怒らせてしまったりする場合もある。そのような場合、いかにして関係を修復するのが問題となる。そこでよく用いられるのが、「謝罪」である。本研究では、児童期初期の子どもの謝罪に罪悪感が伴っているのかどうかについて検討した。

これまでの心理学研究の中で、謝罪は弁明 (accounts) の一種として位置づけられてきた。弁明とは、違反を犯した加害者が葛藤を解決するために取る言語的方略である (Itoi, Ohbuchi, & Fukuno, 1996)。弁明は、「その出来事を引き起こしたのは自分である」という出来事と自分の行為との因果関係の認識や、「その出来事は悪い結果を引き起こした」という結果の有害性の認識、および、「その被害には自分に責任がある」という個人的責任の認識という3つの基準に基づき、弁解 (excuse)、正当化 (justification)、否認 (denial)、謝罪 (apology) の4つに分類される (Itoi et al., 1996)。これら4つの分類を図に示したものが Figure 1 である。

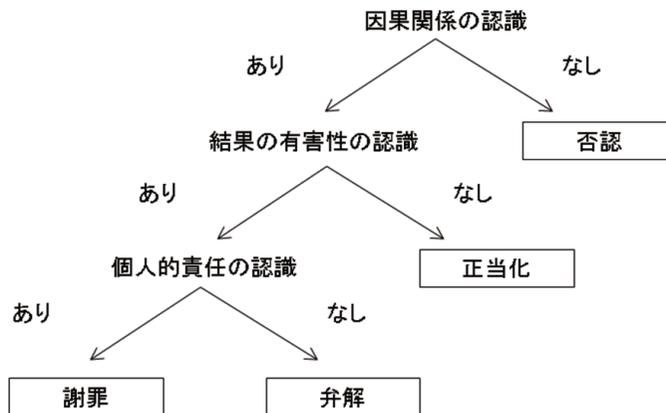


Figure 1. 弁明の分類 (Itoi, et al. (1996) より作成)

まず、そもそも問題となっている出来事と自分の行為との因果関係を認めない、つまり、「自分はやってない」ということを主張するのが「否認」である。また、問題となっている出来事

と自分の行為との因果関係は認めるものの、結果の有害性を最小化しようとする、つまり、「自分がやりました。でも、そんなに悪いことは起こっていない」ということを主張するのが「正当化」である。さらに、因果関係と結果の有害性を認めるものの、個人的責任を最小化しようとする、つまり、「自分がやりました。その結果、悪いことが起こりました。でも、自分だけのせいではない（例えば、「(お互いに) 運が悪かった」、「相手も悪かった」など）」ということをも主張するのが「弁解」である。そして、因果関係も、結果の有害性も、個人的責任も認めた上で、葛藤を解決するために行われる弁解が「謝罪」として分類される。つまり、対人場面において、自分の行為によって相手に被害をもたらしたという認識があり、その責任は自分にあると感じ、その葛藤を解決しようとして相手に何らかの発言をした場合、その言葉が「謝罪」であるといえる。

上述の定義からわかるように、謝罪は「ごめん」という言葉だけに限定されない。Schlenker & Darby (1981) は、謝罪を、1) 「どうもすみません」(Pardon me) とだけ言う、2) 「ごめんなさい」(I'm sorry) と言う、3) 自責の感情を表出する、4) 被害者に助けを申し出る、5) 被害者の許しを乞うために何事か言ったり行ったりする、6) その状況に対して自ら厳しく批判する、という6種類に分類している。このように、謝罪は多様な表現を含むものである。

しかしながら、発達的にみると、「悪いことをしたら謝る」といった場合、「ごめん」という言葉こそが代表的な謝罪として教えられる。本研究では児童の謝罪に焦点を当てるが、児童にとっての謝罪もやはり「ごめんなさい」という言葉であると考えられる。そこで、本研究では、因果関係の認識もあり、結果の有害性の認識もあり、個人的責任も認めた上での「ごめん」という言葉の表出を「謝罪」と定義する。

謝罪は、対人葛藤場面において加害者が最もよく用いる言語的方略とされ (Itoi et al., 1996)、対人葛藤を円滑に解決するのに有効な方略であるといわれている (e.g. Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989)。具体的には、加害者が謝罪することによって、被害者の持つネガティブな印象が改善したり、科せられる罰が軽減したりする (e.g. Darby & Schlenker, 1982; 1989)。また、対人行動の障害やつまづきを改善しようとするソーシャルスキルトレーニング (佐藤, 1999) でも、適切に謝罪できるようになることを獲得すべきスキルとして設定することはよくあることである。このように、「悪いことをしたら謝る」という社会的ルールを理解し、使用できるようになることは、他者との関係を維持していく上で重要である。

そのため、子どもは幼い頃から何か悪いことをしたら謝ることを教えられ、2歳頃には「ごめんね」という言葉を使用するようになる (Ely & Gleason, 2006; 松永, 1993)。初めは、モデルとなる保育者の行為を模倣したり、保育者が介入したりすることによって謝罪するが、徐々に自発的に謝罪できるようになり、様々な目的で「ごめんね」という言葉を使うようになる。例えば、保育者から怒られるのを避けるためであったり、周囲の人に自分の印象をよく見せようとしたり、特に悪いと思っていなくてもその場をしのぐためにとりあえず「ごめんね」と言ったりする。

しかし、本来謝罪は、「悪いことをした」という気持ちが相手に伝わることで、対人葛藤の解決につながる。したがって、一般的に子どもに身につけてもらいたいのは、道具的に謝ることではなく、「悪いことをした」という気持ちから謝る誠実な謝罪である。そのため、先行研

究では、子どもがいつ頃誠実な謝罪ができるようになるのか、また、そのために必要な認知的な能力は何かなどについて検討されてきた。これまでに、6歳頃になると誠実な謝罪ができるようになり、他者の感情を推測する能力が誠実な謝罪を促す要因であることが示されている(中川・山崎, 2005)。

しかしながら、誠実な謝罪ができるようになったからといって、私たちは常に罪悪感を伴う謝罪をするわけではない。このことから、謝罪の発達を考える上で、子どもが謝罪を社会的ルールとして学習し、誠実な謝罪ができるようになるという発達を捉えるだけでは不十分であり、「悪いと思っていなくても謝る」という謝罪の道具的な使用という側面についても検討していくことが必要であると考えられる。しかし、このような観点から子どもがどのように謝罪を理解し、使用できるようになるかについて検討した研究はきわめて少ない。そこで、本研究では、誠実な謝罪ができるようになった6歳以降の児童期の子どもを対象とし、謝罪がどのように使用されているのかを明らかにすることを目的とした。

加害者の謝罪の発達に関する研究の多くは、児童期以前の子どもを対象としている。松永(1993)は、保育園での自由遊び場面について、0歳児から卒園までを縦断的に観察し、1歳半頃には、相手の子どもの頭を撫でるなどの謝罪行為と思われる身体的表現が見られ、2歳頃になると「ごめんね」という言語的謝罪を行うようになる」と報告している。また、9名の子どもとその親との日常会話について、1歳から6歳までを縦断的に分析したEly & Gleason (2006)も、2歳以前に謝罪の言葉を使用することは稀であるとしている。

ただし、この時期は、保育者の示すモデルを模倣したり、保育者が介入したりすることによって謝罪行為がみられる段階であると考えられる(松永, 1993)。したがって、そこには自発的に「葛藤を解決しよう」という意識はない可能性が高い。しかし、そうした謝罪を繰り返すうちに、どういう状況で「ごめんなさい」というべきなのかを学び、謝ることで葛藤が解決されることに気づくようになるのだと考えられる。芝崎(2008)によれば、このような「謝罪効果の認識(recognition of apologies effect)」は4歳から6歳にかけて高まるとされ、謝罪が多用されるようになる背景のひとつと考えられている。

また、謝罪が多用されるようになる幼児期において、子どもが用いる謝罪は質的に変化していくこともわかっている。幼い子どもの謝罪は、保育者から怒られるという罰を回避するために行われることが多く(中川・山崎, 2004)、このような、何らかの目的を達成するために行われる謝罪のことを道具的謝罪(instrumental / perfunctory apology)という。これに対し、責任を受容し、罪悪感の認識を伴った謝罪のことを誠実な謝罪(sincere apology)という(中川・山崎, 2004, 2005)。中川・山崎(2005)は、5、6歳児を対象に仮想場面を用いた調査を行い、誠実な謝罪の出現時期について検討している。子ども同士がおもちゃを取り合う場面において、おもちゃを取り上げた加害者の子どもが、泣いてしまった被害者の子どもに謝罪したという仮想の物語を聞かせた。そして、加害者の子どもは被害者の子どもが泣いているのは自分のせいだと思っているかという「責任の受容」についての質問と、加害者の子どもは被害者の子どもに悪いことをしたと思っているかという「罪悪感の認識」についての質問を行った。その結果、5歳児においては、ほとんどの子どもが責任を受容すると答えたが、罪悪感を認識しないと答える子どもの方が多かった。一方、6歳児では、ほとんどの子どもが責任を受容し、かつ罪悪

感を認識すると答えた。この結果から、子どもが誠実な謝罪ができるようになるのは6歳以降であり、それ以前の子どもの謝罪の多くが保育者からの罰を回避するための道具的謝罪であることが示唆された。

また、中川・山崎（2004）は、4歳児と6歳児を対象に仮想場面を用いた調査を行い、謝罪の種類と相手との親密性の関連を検討している。中川・山崎（2005）と同様の仮想場面を用いて、加害者が被害者に謝ったのはどうしてだと思いかを尋ね、「先生が見ているので、先生に叱られたら嫌だから謝ろうと思って謝った」（道具的謝罪）、もしくは、「おもちゃを取ってしまってゆうくに悪いことしたなと思って謝った」（誠実な謝罪）のいずれかを選択するように求めた。その結果、4歳児は相手との親密度に関係なく道具的謝罪を行うと答えるのに対し、6歳児では親密度の低い相手には道具的謝罪、親密度の高い相手には誠実な謝罪を行うと答えた。この結果から、6歳になると、誠実な謝罪が可能となるだけでなく、それまで使用してきた道具的謝罪と誠実な謝罪の両方を使い分けていることが示唆された。

ただし、5歳児は被害者に誠実な謝罪をしないのではなく、被害者の感情を推測する能力が十分に備わっていないために誠実な謝罪ができない可能性があり、5歳児であっても、被害者の感情を推測するように促すことによって、誠実な謝罪が可能となることも示されている（中川・山崎，2005）。このことから、誠実な謝罪が可能となる6歳以降、道具的謝罪はより戦略的に使用されることが予想される。

これに関し、齊藤・荻野（2004）は、成人を対象に、謝罪の表明と本心の相違を調べた結果、表面上謝罪するが、内心は謝罪する気持ちは持っておらず、謝罪が対人場面における印象操作の方法として多用されていることを示唆している。

以上の先行研究をまとめると、加害者の謝罪の発達過程はおおよそ以下のような経過をたどるといえる。まず、子どもは2歳頃に「ごめんね」という言語的な謝罪ができるようになり、その後「謝罪効果の認識」が発達するにつれ、謝罪を多用するようになる。ただし、幼児期の初期は保育者の罰を回避することを目的とした道具的謝罪が多く、他者の感情を推測する能力が発達する6歳頃になると、「罪悪感の認識」を伴う誠実な謝罪ができるようになる。しかし、それ以降も状況によっては道具的謝罪を用いることがあり、成人になっても謝罪が対人場面における印象操作の方法として多用されていることがわかっている。しかし、6歳から成人にかけて、加害者の謝罪がどのように発達的に変化するかという点については不明である。

そこで、田村（2009）は、誠実な謝罪を獲得してすぐの時期である小学校低学年の児童19名を対象に、「悪いと思っていなくても謝る」ということがどの程度行われているのかを調べるため、日常場面における謝罪のエピソードについて収集した。まず、「お友達に謝ったことがあるか」という質問について、「謝ったことがある」と回答したのは19名中15名であった。そして、謝ったことがあると答えた子どもに「それはどういうことがあったときか」を尋ねたところ、12個のエピソードが得られ、物理的被害のないものより、物理的被害のあるものの方が多く報告された。このことから、小学校低学年の児童にとって、被害が目に見えてわかりやすい状況でよく謝罪する可能性が示唆された。また、「謝ったとき、どんな気持ちだったか」を尋ねた結果、子どもが報告したエピソードには、責任の受容や罪悪感の認識の伴う誠実な謝罪が多いことが示唆された。このことは、小学校低学年の児童は、日常的に誠実な謝罪をよく

行っていることを示唆している。しかしながら、経験の自己報告という形式であったため、たまたま想起されたエピソードとして誠実な謝罪が多かった可能性や社会的望ましさの影響から誠実な謝罪を報告した可能性も考えられる。

そこで、本研究では、この問題点を解決するため、複数の仮想場面を用いて、誠実な謝罪と道具的謝罪の出現頻度を調べることにした。ここでは操作的に、罪悪感を伴う謝罪を「誠実な謝罪」、罪悪感を伴わない謝罪を「道具的謝罪」と定義する。その際、齊藤・荻野（2004）を参考に、仮想場面をP-Fスタディ形式の図版で呈示するという方法を用いた。P-Fスタディとは、絵画を用いた場面構成で、フラストレーション時における対人的発話を調べ、その反応を分析し、攻撃性の方向と型からその人の性格を診断する質問紙形式のテストである（cf. Rosenzeig, 1945）。P-Fスタディの回答は発話形式であるため加害者の謝罪行為が検討しやすいことと、投影法であるため子どもが社会的に望ましい反応をみせようとせず、本心からの反応を得やすいと考えられる（齊藤・荻野, 2004）ことから、本研究に適している課題であると考え、この形式を用いることにした。

方 法

対 象

京都市内の学童保育所に通う小学校低学年の児童 24 名を対象に調査を実施した。内訳は、1 年生 11 名（女子 6 名、男子 5 名）、2 年生 13 名（女子 6 名、男子 7 名）であった。

材 料

対人葛藤場面を線画で描いた B5 判の図版を女兒版と男児版の 2 種類作成した（資料 1 参照）。作成した図版は、P-F スタディ型の図版を参考に、二人の子どもが描かれ、右側の子どもが左側の子どもに被害を与えている場面とした。図版に描かれた子どもの顔はすべて空白であった。さまざまな先行研究で用いられている対人葛藤場面や田村（2009）で得られたエピソードを参考に、加害行為の意図性（偶発、故意、曖昧）と被害内容（物理的、心理的）に着目し、計 6 つの葛藤場面を作成した（Table 1）。

Table 1. 仮想場面のエピソード

加害行為の意図	被害内容	
	物理的	心理的
偶発	ろうかを走っていてぶつかる	友達か描いた絵だと知らずに「へたくそ」という
故意	投げたボールが頭にあたる	ブランコにかわってあげない
曖昧	本を取り合っているうちに本が破れる	遊ぶ約束をしていたのに他の子と遊ぶ

手 続 き

対象児が通う学童保育所の一室にて、個別のインタビュー調査を行った。「今から絵を見て

お話を作るのを手伝ってください」と教示し、図版を1枚ずつ提示しながら、場面の説明を行った。その後、場面ごとに、以下の2つの質問を行った。

言語反応質問：(加害者を指しながら) この子は何て言うでしょう？

罪悪感質問：(加害者を指しながら) この子は悪いことをしたと思っているかな、思っていないかな？

6つの場面は、意図性について呈示順序をカウンターバランスし、被害内容についてはランダムに呈示した。他に、本論文とは直接関係のない内容に関する項目についても質問を行った。児童の発言はすべてボイスレコーダーで録音して記録した。

結 果

言語反応

「言語反応質問」に対する子どもの回答を「謝罪」反応と「その他」の反応に分類し、場面ごとに、それぞれの反応を示した子どもの人数と割合を Table 2 に示した。「ごめん」あるいは「ごめんなさい」という表現が含まれている反応を「謝罪」反応とし、それ以外はすべて「その他」とした。

場面によって、謝罪する割合が異なるかどうかを検討するため、Cochran の Q 検定を行った。その結果、場面間で謝罪する割合の差は有意であった ($Q(5)=32.78, p<.001$)。しかし、Ryan 法による多重比較の結果、故意-心理的場面のみ謝罪する割合が有意に低く、その他の場面間の差は有意ではなかった。そもそも、故意-心理的場面では、「謝罪」反応がみられず、すべての子どもが「その他」の反応であった。具体的には、ブランコをかわってあげなかったために被害者が「いじわる」と責められる場面で、「じゃあかわってあげる」とすぐに交代を申し出る反応や、「もうちょっと乗らせて」「30秒したらわかるよ」などと条件つきで交代を申し出る反応の他、「絶対かわってあげない」「いじわるでいい」など交代を拒否し続ける反応があった。

Table 2. 「言語反応質問」に対する場面ごとの各回答者数 (%)

		被害内容	謝罪	その他
加害行為の意図性	偶発	物理的	15 (62.5)	9 (37.5)
		心理的	8 (33.3)	16 (66.7)
	故意	物理的	17 (70.8)	7 (29.2)
		心理的	0 (0.0)	24 (100.0)
	曖昧	物理的	8 (33.3)	16 (66.7)
		心理的	7 (29.2)	17 (70.8)

罪悪感

「罪悪感質問」に対する子どもの回答を「罪悪感あり」と「罪悪感なし」に分類し、場面ごとに、それぞれの反応を示した子どもの人数と割合を Table 3 に示した。

場面によって、罪悪感をもつ割合が異なるかどうかを検討するため、Cochran の Q 検定を行った。その結果、場面間で罪悪感をもつ割合の差は有意ではなかった ($Q(5)=8.50, n.s.$)。どの場面においても、罪悪感が喚起される子どもとされない子どもがそれぞれ半数程度存在することがわかった。

言語反応と罪悪感の関連

誠実な謝罪と道具的謝罪の出現頻度を検討するため、すべての仮想場面を込みにし、加害者の言語反応と罪悪感との関連を Table 4 に示した。「謝罪」反応を示した中で、罪悪感があると回答した割合が 78.2% (43/55)、罪悪感がないと回答した割合が 21.8% (12/55) であり、罪悪感を伴う誠実な謝罪の出現頻度が高いことが示された。また、それぞれの子どもが 6 場面中で「謝罪」反応を示した回数と、罪悪感があると答えた回数の相関を算出したところ、有意な相関が得られた ($r=.65, p<.01$)。つまり、「謝罪」反応が多いほど、罪悪感があると答える回数が多い傾向が示された。

Table 3. 「罪悪感質問」に対する場面ごとの各回答者数 (%)

		被害内容	罪悪感あり	罪悪感なし
加害 行為 の 意 図 性	偶発	物理的	17 (70.8)	7 (29.2)
		心理的	9 (37.5)	15 (62.5)
	故意	物理的	12 (50.0)	12 (50.0)
		心理的	10 (41.7)	14 (58.3)
	曖昧	物理的	11 (45.8)	13 (54.2)
		心理的	12 (50.0)	12 (50.0)

Table 4. 言語反応と罪悪感の関連

		言語反応	罪悪感あり	罪悪感なし
謝罪	(n=55)		43 (78.2)	12 (21.8)
その他	(n=89)		28 (31.5)	61 (68.5)

() 内は反応数の割合 (%)

考 察

Table 2 より、場面によって謝罪する割合が異なっていることが示されたものの、統計的には、故意 - 心理的場面以外の場面間では差は有意ではなかった。また、Table 3 より、場面によって罪悪感をもつ割合の差は有意ではなく、罪悪感が喚起される子どもとされない子どもがそれぞれ半数程度存在していることが示された。これらの結果から、今回用いた仮想場面において、謝罪するかどうかや罪悪感をもつかどうかは、個人差が大きかった可能性が考えられる。

そこで、すべての場面を込みにし、言語反応と罪悪感との関連を検討した結果、すべての謝罪反応 (n=55) のうち、約 80% が罪悪感を伴っており (Table 4)、謝罪反応を示す子どもほど、罪悪感があると回答する傾向があることがわかった。このことから、6 歳で誠実な謝罪が獲得された後、少なくとも小学校低学年の時期には、大人のように道具的に謝罪することよりも誠実に謝罪することが多いのではないかということが示唆される。この結果は、日常場面におけるエピソードとして、誠実な謝罪が多く報告された田村 (2009) の結果を支持するものであるといえる。しかし、本研究では小学校低学年の児童のみを対象としたため、上述のような謝罪の発達の変化を捉えるためには、同一の課題で直接 6 歳から 8 歳以降の子どもを対象に検討することが必要である。

一方で、すべての謝罪反応 (n=55) のうち、約 20% は罪悪感を伴わない謝罪、すなわち、道具的謝罪であることも示された。例えば、故意 - 物理的被害場面において、「謝罪」反応は 17 人いるのに対し (Table 2)、「罪悪感あり」と回答したのは 12 人である (Table 3)。つまり、この場面において、少なくとも 5 人は悪いことをしたと思っていなくても謝罪を行っているということである。しかしながら、このような道具的謝罪が、4 歳児までに多くみられるような「罰の回避」を目的としたものか、成人でよくみられるとされる「印象操作」を目的としたものかなど、子どもがどのような理由で謝罪しているのかという点にしては、本研究からは不明である。しかし、子どもがどのような目的から謝罪を行うのかを検討することは、謝罪の発達的变化を明らかにする上で重要な観点であり、今後の検討課題である。

さらに、罪悪感があるとしながら、「その他」に分類された反応が少なくなかったことに注意が必要である。このような反応には 2 種類あり、1 つはブランコの順番をかわってあげずに被害者に責められ、「じゃあかわってあげる」と交代を申し出るといった、被害に対する補償を申し出る反応である。ブランコの場面以外にも、約束していたのに他の子と遊んでしまったという場面で、「明日遊ぼう」という反応などがみられた。このような補償的反応は、「ごめん」という謝罪の言葉はなくとも、相手に配慮した提案をしている反応であるといえ、対人葛藤解決には有効な方略であると考えられる。

もう 1 つは、友達を描いた絵だと知らずに「へたくそ」と言ってしまう場面で、「だってほんとに下手なもの」という反応や、約束をやぶった場面で「忘れてた」などの反応のように、悪いことをしたと思っていながら、素直に謝れなかったと考えられる反応である。インタビューにおける子どもたちの感想などでも、「謝るのには勇気がいる」といった意見は少なくなく、「謝りたくても謝れない」といった場面は日常的にもよくあるのではないかと思われる。このような場合、せっかく罪悪感をもっているのに、被害者の子どもにそれが伝わらず、葛藤が解決さ

れない可能性が高いと考えられる。このことから、対人葛藤場面において教師や親が介入する際、罪悪感が伝わる言動があれば謝罪の言葉にこだわる必要はなく、また謝罪の言葉がないからと言って謝りたくないわけではないという子どもの心理にも配慮する必要があると思われる。

中川・山崎(2005)は、5歳児は被害者の感情を推測する能力が十分に備わっていないために誠実な謝罪ができないと考え、5歳児であっても、被害者の感情を推測するように促すことによって、誠実な謝罪が可能となることを実証している。しかし、罪悪感があっても謝れないという場合があると示唆されたことから、今後、誠実な謝罪の生起に影響を及ぼす要因について検討する必要があるだろう。そして、加害者の誠実な謝罪の表出プロセスが明らかになることにより、対人葛藤場面におけるより効果的な介入方法についての知見が得られることが期待される。

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただいた学童保育所の先生方ならびに児童の皆様へ、心より御礼申し上げます。また、本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科の子安増生教授に深く感謝いたします。

文 献

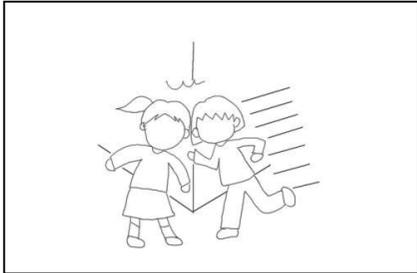
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R.(1982). Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R.(1989). Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 28, 353-364.
- Ely, R., & Gleason, J. B.(2006). I'm sorry I said that: Apologies in young children's discourse. *Journal of Child Language*, 33, 599-620.
- Itoi, R., Ohbuchi, K., & Fukuno, M.(1996). Across-cultural study of preference of accounts: Relationship closeness, harm severity, and motives of account making. *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 913-934.
- 松永あけみ.(1993). 子ども(幼児)の世界の謝罪. 日本語学, 12, 84-93.
- 中川美和・山崎 晃.(2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. 教育心理学研究, 52, 159-169.
- 中川美和・山崎 晃.(2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. 発達心理学研究, 16, 165-174.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N.(1989). Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- Rosenzeig, S.(1945). The picture association method and its application in a study of reaction to frustration. *Journal of Personality*, 14, 3-23.
- 齊藤 勇・荻野七重.(2004). 自己呈示としての謝罪言葉の実証的アプローチ. 立正大学心理学部研究紀要, 2, 17-33.
- 佐藤正二.(1999). 社会的スキル訓練(social skill training; SST), 心理学辞典, 中島義明監修, 有斐閣, 371.
- Schlenker, B. R., & Darby, B. W. (1981). The use of apologies in social predicament. *Social Psychology Quarterly*, 44, 271-278.
- 芝崎美和.(2008). 親密性が幼児の謝罪効果の認識に与える影響. 幼年教育研究年報, 30, 41-48.
- 田村綾菜.(2009). 児童の日常場面における謝罪—小学校低学年を対象としたインタビュー調査から—(中間報告) 発達研究, 23, 247-249.

(教育認知心理学講座 博士後期課程3回生)

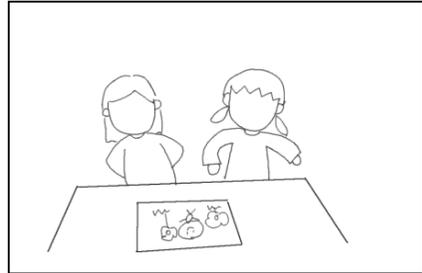
(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

資料1 研究で用いた図版（女兒版）

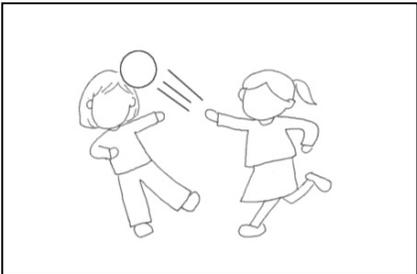
偶発-物理的場面



偶発-心理的場面



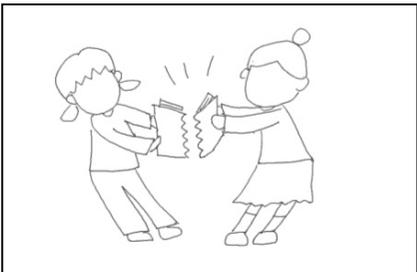
故意-物理的場面



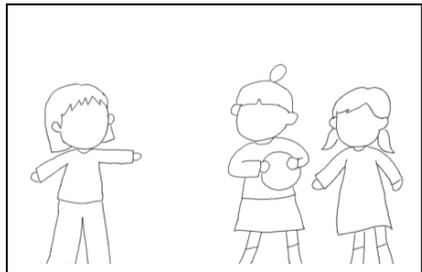
故意-心理的場面



曖昧-物理的場面



曖昧-心理的場面



Children's Apologies and Feelings of Guilt in Interpersonal Conflict Situations

TAMURA Ayana

This study examines whether apologies by children are sincere or perfunctory. Twenty-four children (7-8 years old) participated. An individual interview was conducted with each during 6 drawings about frustration situations. The situations included three types of harm-doer's intentions (intentional, accidental, or ambiguous) and two types of damage (physical or mental). The experimenter told some stories and asked each child what he or she thought the harm-doer would say to the victim and whether the harm-doer would feel sorry for them. The results showed that children voluntarily apologized more frequently in two physical damage situations (intentional and accidental) and less frequently in mental damage situations (intentional). Also, voluntary apology responses were accompanied by guilt more frequently than no-apology responses. We concluded that most children's apologies related to guilt feelings, but that they depended on the situation a child faced. This result suggested that children used both a sincere apology and a perfunctory apology as the situation demanded. Implications for further research on conflict resolutions were discussed.